

# 自我形成期における居場所の機能的役割

— 自尊心および親和傾向に着目して —

○藤田依久子<sup>1)</sup>, 玉城あゆみ<sup>2)</sup>, 今井唯理<sup>2)</sup>, 田窪綾香<sup>2)</sup>, 高城佳那<sup>3)</sup>

(<sup>1)</sup>安田女子大学心理学部, (<sup>2)</sup>安田女子大学大学院, (<sup>3)</sup>静岡産業大学経営学部)

## 研究の目的

居場所感の適応的効果が研究される一方で、個々人の過去・現在における居場所の変化について検討されているものは少ない。そこで本研究では居場所欠乏感の実体や喚起される背景について質問紙調査を行い、個々人が安心できる居場所作りを検討することを目的とする。

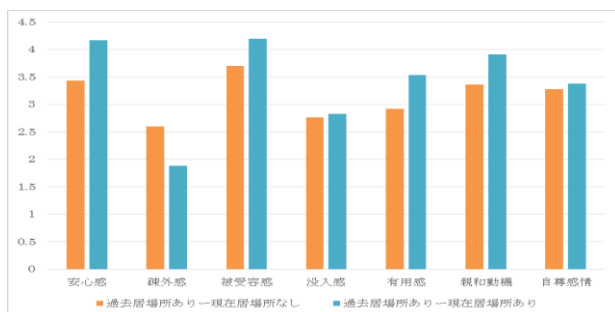
## 方法

調査対象：広島私立女子大学の学生 170 名（有効回答数 150 名，平均年齢 19.1 歳）

手続き：質問紙調査で、高校時代の居場所と大学で新たに獲得した居場所の有無と、居場所感尺度<sup>1</sup>を用いて、それぞれの居場所における居場所感を測定した。また自尊感情尺度<sup>2</sup>と親和動機尺度<sup>3</sup>における親和傾向因子を用いて、現在の自尊心と親和傾向を測定した。面接調査では、居場所の獲得経験、喪失経験のある3名に面接調査を行った。

## 結果

質問紙調査の結果、高校時代も現在も居場所があると回答したグループと、現在新たに獲得した居場所がないグループを比較した結果、自尊感情と没入感以外の因子得点平均において 0.49 以上の差が見られた（安心感 -0.74，疎外感 +0.72，非受容感 -0.49，有用感 -0.61，親和動機 -0.55）。



次に、高校時代も現在も居場所があると回答したグループに対応ありの *t* 検定と平均値の比較を行ったところ、自己没入感以外の因子で有意な得点の差が認められた。また、現在の居場所は高校時代と比較して、疎外感や自己有用感の得点が高く、精神的安心感や被受容感の得点が低いことが示された。

面接調査の結果は、高校時代に居場所があった

が現在居場所がない学生は、何でも話せる人がいるということを感じることが、現在は友人がいるものの孤独感を感じ、居場所がないようであった。高校時代に居場所がなかったが大学に入って居場所を見つけた学生は、一人暮らしの家を自分の居場所と感じ、外にいる時には人に気を使う傾向にあった。

## 考察

新たに獲得した居場所がないグループは、日常生活で居場所があると感じていないことが示唆され、人と一緒にいたいという思いの強さが、積極的な居場所の獲得に影響していると考えられる。大学生の居場所感の特徴として、自主的に行動する場面が増え、居場所での有用感を感じやすいと考えられる一方、個人活動が増えて孤独感が増し、疎外感や不安感を抱きやすいと考えられる。

居場所獲得経験については、高校までは人目を気にせずいられる環境を居場所と感じると考えられる。居場所喪失経験については、友人と共に過ごす時間の減少や、個人行動が増加したことによる寂しさのためであると考えられる。

大学での居場所づくりは、集団の一員だという感覚を高められるようなものが望ましいが、その必要性は個人により異なる。高校時代に居場所がなかった場合は、自己有用感を高められるような居場所づくりが望ましい。本研究では、自尊感情に関する結果が十分に得られず考察ができなかったため、引き続き居場所づくりを検討していく必要があると考える。

## 参考文献

- 1) 藤田依久子 (2004). 現代日本の若者の自我形成危機とポストモダン 学習院大学大学院政治学論集, 17, 139-185.
- 2) 岸可奈子・諸井克英 (2011). 女子大学生における居場所感覚-大学と家庭という心理的空間- 同志社女子大生生活科学, 45, 20-28.
- 3) 杉浦健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係-その発達的变化- 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 4) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.